【原著】 大学入試研究ジャーナル第 30 号，86-91，2020.

アドミッション・ポリシーに基づく入学者選抜の妥当性

――入学直後の自己評価による検証――

大塚 智子，関 安孝，喜村 仁詞，武内 世生（高知大学）

「求める能力を備えた学生が入学したか」は，入学者選抜における最大の課題である。アドミッション・ポリシー（以下，AP）に基づく入学者選抜の妥当性を，入学直後の学生の AP に関する自己評価により検証した。2018 年度高知大学医学部医学科入学者を対象に調査した。自己評価結果より，本学医学科の入学者選抜は，AP に合致した受験生を選抜できていることが明らかになった。入学直後の学生の AP に関する自己評価は，入学者選抜の特徴を反映することが示された。

キーワード：アドミッション・ポリシー，自己評価，妥当性

1 背景

1.1 入学者選抜の妥当性検証における AP の役割

大学にとっての望ましい入学者選抜とは，「大学が求める能力を備えた学生が入学する」ことであり，入学者選抜における最大の課題だといえる。大学は入学者に求める能力をアドミッション・ポリシー（以下，AP）として示している。ゆえに「AP を満たす学生が入学する」ことが大学にとっての望ましい選抜であり，入学者選抜における妥当性の検証課題となる。

入学者選抜の妥当性を検証するには，入学後の成績と入試結果を比較する方法が一般的である。しかし，入学後の成績だけでは AP を満たしているのかの判断は難しい。AP を満たしているかを判断するには，やはり AP を調査対象として検証する必要がある。

1.2 入試改革の課題：AP，学力の 3 要素，選抜方法の関係

今まであまり言及されてこなかったが，各大学の AP の見直しも，2020 年度より開始する新たな大学入学者選抜における課題の 1 つである。西郡（2014）によると，AP において「高校において身につけておくべき教科･科目」及び「求める能力を評価する方法」の両観点を示す大学は全国立 82 大学中 3 大学しか存在せず，こうした観点を AP に含め，評価対象と評価方法の対応付けを測ることで，検証に耐えうる AP 策定が可能だと提案している。求める能力（評価対象）については，知識，態度，課題解決能力など多様な単語が各大学で散見されてきたが，今回の入試改革により「学力の 3 要素」の大枠に集約された。文部科学省は入試改革の趣旨として「各大学の入学者選抜において，卒業認定・学位授与の方針，教育課程編成・実施の方針を踏まえた入学者受入れの方針に基づき『学力の 3 要素』を多面的・総合的に評価するものへと改善する」と示しており（文部科学省，2018: 3），つまり，入試改革においては「AP に基づき『学力の 3 要素』を評価する」ことが公式の課題となった。「学力の 3 要素」とは，「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力」，「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（以下，主体性･多様性･協働性）」の 3 つを示し，社会で自立して活動していくために必要な身につけるべき力として定義される（文部科学省，2016）。今後は，AP をこの「学力の 3 要素」と紐付け，更に AP と選抜方法の関係を示す必要がある。

本研究では，高知大学の入学者選抜において AP に基づいた選抜を実施し，選抜の特徴を反映した学生が入学しているかを調査することにより，AP に基づく入学者選抜の妥当性を検証する。

2 高知大学における AP の再策定

2.1「学力の 3 要素」及び「関心・意欲」による AP の整理（図 1）

本学においては，AP は学部もしくは学科ごとに設定している。本学の AP 各項目が，学力の 3 要素である「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力」，「主体性・多様性・協働性」及び「関心・意欲」のいずれに属するのか整理し分類した。本学では「関心・意欲」を入学者に求める要素として学力の 3 要素に追加し設定している。これにより，単に列記されていた AP 各項目が，より上位の要素である「学力の 3 要素」と「関心・意欲」に集約され，AP と「学力の 3 要素」及び「関心･意欲」との関係が明確となった。

知識・技能

1. 幅広い医学知識を学ぶ基礎となる高等学校教育課程の教科・科目の修得によって培われた十分な知識を有している。

思考力・判断力・表現力

1. 学習及び生活の中で自ら積極的に問題点をみつけ，解決方法を探求することができる。
2. 科学的根拠に基づいて問題を分析的，批判的に考え，解決することができる。
3. 自分の考えを論理的に構成し，口頭あるいは図や文章を用いて明確に表現することができる。

主体性・多様性・協働性

1. 自発的で継続的な自己学習の習慣を身につけている。
2. 協調性や他者への深い思いやりがあり，周囲と良好なコミュニケーションをとることができる。
3. 多様な背景を持つ他者の能力を認め，同じ目標に向かって協働することができる。

関心・意欲

1. 生命科学や医学・医療に対する強い関心・意欲を持っている。
2. 高い倫理観を有し，自分の発言や行動に責任を持つことができる。

図 1 高知大学医学部医学科アドミッション・ポリシー

2.2「学力の 3 要素」及び「関心・意欲」と選抜方法の対応（表 1）

AP が選抜に際して受験生に参考となるためには，AP を学力の 3 要素で分類するだけでなく，AP と実際の選抜との関係を明確にする必要がある。本学では，科目試験や面接などの選抜における各評価方法が，AP のどの項目とより関係が深いかを検討し，その上位の要素である学力の 3 要素及び関心・意欲との関係を「選抜方法と評価する能力の対応表」として集約した。これにより，選抜においてどのような能力を重視するかという評価の観点が,「学力の 3 要素」及び「関心・意欲」を介して AP と紐付いた。

3 高知大学医学部医学科の入学者選抜

3.1 AO 入試

本学医学科 AO 入試は,2 段階の選抜を行っている。第 1 次選抜では，特に「知識・技能」,「思考力・判断力・表現力」を重視する。AO 入試は大学入試センター試験を課さないかわりに,第 1 次選抜で小論文,総合問題Ⅰ（数学，英語），総合問題Ⅱ（物理・化学・生物から 2 科目選択）からなる学力試験を課す。この学力試験の評価と出願時の提出書類である自己推薦書，活動報告書，調査書の評価を合わせて，第 1

表 1 選抜方法と評価する能力の対応表（高知大学医学部医学科）

			アドミッション・ポリシー			
			学力の 3 要素			関心・意欲
			知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体性・多様性・協働性	
AO 入試	第 1 次選抜	自己推薦書		○	○	○
		活動報告書	○		○	
		調査書	○	○		
		小論文	○	◎		
		総合問題	◎			
	第 2 次選抜	態度・習慣領域評価	○	◎	◎	◎
		面 接		○	○	◎
推薦入試	大学入試センター試験		◎	○		
	個別学力検査	面 接		◎	○	◎
一般入試	大学入試センター試験		◎	○		
	個別学力検査	科目試験	◎	○		
		面 接		◎	○	○

次選抜の合否判定を行う。募集人員 30 名の 2 倍である 60 名を目途に，第 1 次選抜の合格者を決定する。

第 2 次選抜では，特に「思考力・判断力・表現力」，「主体性・多様性・協働性」，「関心・意欲」を重視する。第 1 次選抜の合格者 60 名を 15 名ずつに分け，それぞれに対して 1 日目に態度・習慣領域評価を，2 日目に面接を実施する。つまり合計 8 日間かけて第 2 次選抜を行う。態度・習慣領域評価では，1 グループ 5 名の SGD（Small Group Discussion）により，提示されたシナリオ（A4 用紙 1 枚）から学習すべき問題点を抽出し，その問題解決を図る PBL（Problem Based Learning）と，その成果発表を 1 日 9 時間にわたって繰り返す。5 名の評価者が，その過程におけるすべての行動を観察し評価を行う。2 日目は約 20 分間の個人面接を実施し，主に医学や地域医療に対する関心・意欲等を評価している。最終合格者は第 2 次選抜における態度・習慣領域評価と面接評価の合計得点上位者から決定するが，その際，第 1 次選抜の成績は一切考慮せず，完全に分離して判定を行う。

3.2 推薦入試

推薦入試は，高知県内の地域医療に貢献できる人材を選抜することを目的としており，入学者には高知県より奨学金が給付される。選抜では，特に「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力」，「関心・意欲」を重視する。出願は AO 入試合格発表後の 11 月に行い，選抜は，大学入試センター試験（5 教科 7 科目）と面接を課している。面接は約 15 分間の個人面接を実施し，主に医学や地域医療に対する関心・意欲を評価する。合否は，大学入試センター試験の成績，面接に加え，調査書，推薦書，志望理由書を総合して判定する。

3.3 一般入試

一般入試では，特に「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力」を重視する。選抜は，大学入試センター試験（5 教科 7 科目）の他に，個別学力検査として数学（ⅠA，ⅡB，Ⅲ），理科（物理，化学，生物から 2 科目選択），英語，面接を課し，面接では，調査書，履歴書を資料として用いる。合否は，大学入試センター試験の成績，個別学力検査の成績を総合して判定する。

4 解析方法

4.1 AP に関する自己評価：自己評価項目

平成 30 年度高知大学医学部医学科入学者 110 名（AO 入試入学者 30 名，推薦入試入学者 20 名，一般入試入学者 60 名）を調査対象とした。調査は，AO 入試入学者は入学前学習サイトである「高知大学入学前 moodle[1)]」において実施した。推薦入試と一般入試は，入学までの期間が短く入学前学習を行っていないため，調査は入学直後に「高知大学 moodle[2)]」において行った。いずれも，入学者からは本研究に関する同意を得ている。入学者は，AP に関する 18 項目について自身がどの程度あてはまるかを 5 段階（かなりあてはまる～ほとんどあてはまらない）で評価した。評価項目は表 2 のとおりである。回答結果は「かなりあてはまる」を 5 点，「ややあてはまる」を 4 点，「どちらともいえない」を 3 点，「あまりあてはまらない」を 2 点，「ほとんどあてはまらない」を 1 点に換算し，これを自己評価スコアとして，AO 入試入学者，推薦入試入学者，一般入試入学者の 3 群間で比較した。

表 2 AP に関する自己評価項目

要素	自己評価項目
知識・技能	高校で学んだ「国語」について十分な知識がある。
	高校で学んだ「社会」について十分な知識がある。
	高校で学んだ「数学」について十分な知識がある。
	高校で学んだ「理科」について十分な知識がある。
	高校で学んだ「英語」について十分な知識がある。
思考力・判断力・表現力	学習及び生活の中で自ら積極的に問題点をみつけ，解決方法を探求することができる。
	科学的根拠に基づいて問題を分析的，批判的に考え，解決することができる。
	自分の考えを論理的に構成することができる。
	自分の考えを口頭あるいは図や文章を用いて明確に表現することができる。
主体性・多様性・協働性	自発的で継続的な自己学習の習慣を身につけている。
	協調性や他者への深い思いやりがある。
	周囲と良好なコミュニケーションをとることができる。
	他者の能力を認めることができる。
	他者と同じ目標に向かって協働することができる。
関心・意欲	生命科学に対する強い関心・意欲を持っている。
	医学・医療に対する強い関心・意欲を持っている。
	高い倫理観を有している。
	自分の発言や行動に責任を持つことができる。

4.2 AP に関する自己評価：「学力の 3 要素」及び「関心・意欲」

AP に関する自己評価スコアについて，「学力の 3 要素」及び「関心・意欲」の各要素の平均スコアを算出し，AO 入試入学者，推薦入試入学者，一般入

試入学者の3群間で比較した。解析は，いずれもSPSS ver.20を用い，Kruskal-Wallis検定の後，Mann-WhitneyのU検定で多重比較を行いBonferroni補正を行った。

5 結果

5.1 APに関する自己評価：自己評価項目

平成30年度高知大学医学部医学科入学者106名（AO入試入学者30名，推薦入試入学者20名，一般入試入学者56名）が回答した。各自己評価項目のスコアをAO入試入学者，推薦入試入学者，一般入試入学者の3群間で比較した結果を表3に示す。多くの項目でAO入試入学者が高いスコアを示したのに対し，推薦入試入学者は低いスコアを示している。

AO入試入学者が推薦入試入学者より高いスコアとなったのは，以下の7項目だった。「知識・技能」に関する1項目：「高校で学んだ『英語』について十分な知識がある（p=0.030）」。「思考力・判断力・表現力」に関する2項目：「学習及び生活の中で自ら積極的に問題点をみつけ，解決方法を探求することができる（p=0.003）」，「科学的根拠に基づいて問題を分析的，批判的に考え，解決することができる（p=0.003）」。「主体性・多様性・協働性」に関する2項目：「周囲と良好なコミュニケーションをとることができる（p=0.012）」，「他者と同じ目標に向かって協働することができる（p=0.012）」。「関心・意欲」に関する2項目：「生命科学に対する強い関心・意欲を持っている（p=0.048）」，「自分の発言や行動に責任を持つことができる（p=0.030）」。

AO入試入学者が一般入試入学者より高いスコアとなったのは，以下の3項目だった。「主体性・多様性・協働性」に関する2項目：「周囲と良好なコミュニケーションをとることができる（p=0.024）」，「他者と同じ目標に向かって協働することができる（p=0.015）」。「関心・意欲」に関する1項目：「医学・医療に対する強い関心・意欲を持っている（p=0.039）」。

一般入試入学者がAO入試入学者より高いスコアとなったのは，以下の1項目だった。「知識・技能」

表3 APに関する自己評価：各自己評価項目の選抜別平均スコア

要素	自己評価項目	AO入試	推薦入試	一般入試	検定
知識・技能	高校で学んだ「国語」について十分な知識がある。	3.13	3.10	3.02	
	高校で学んだ「社会」について十分な知識がある。	2.83	3.35	3.40	†
	高校で学んだ「数学」について十分な知識がある。	3.77	3.25	4.02	‡‡
	高校で学んだ「理科」について十分な知識がある。	3.97	3.65	4.24	‡‡
	高校で学んだ「英語」について十分な知識がある。	4.13	3.45	3.76	*
思考力・判断力・表現力	学習及び生活の中で自ら積極的に問題点をみつけ，解決方法を探求することができる。	4.23	3.50	3.89	**
	科学的根拠に基づいて問題を分析的，批判的に考え，解決することができる。	3.87	3.20	3.75	**‡
	自分の考えを論理的に構成することができる。	3.70	3.53	3.77	
	自分の考えを口頭あるいは図や文章を用いて明確に表現することができる。	3.79	3.50	3.49	
主体性・多様性・協働性	自発的で継続的な自己学習の習慣を身につけている。	3.90	3.60	3.91	
	協調性や他者への深い思いやりがある。	4.53	4.15	4.26	
	周囲と良好なコミュニケーションをとることができる。	4.47	3.95	4.08	*†
	他者の能力を認めることができる。	4.77	4.40	4.43	
	他者と同じ目標に向かって協働することができる。	4.80	4.40	4.43	*†
関心・意欲	生命科学に対する強い関心・意欲を持っている。	4.63	4.15	4.19	*
	医学・医療に対する強い関心・意欲を持っている。	4.93	4.70	4.61	†
	高い倫理観を有している。	4.00	3.70	4.08	
	自分の発言や行動に責任を持つことができる。	4.30	3.85	4.19	*

AO入試 vs. 推薦入試（*p<0.05, **p<0.01）
AO入試 vs. 一般入試（†p<0.05）
一般入試 vs. 推薦入試（‡p<0.05, ‡‡p<0.01）

に関する 1 項目：「高校で学んだ『社会』について十分な知識がある（p=0.030）」。

一般入試入学者が推薦入試入学者より高いスコアとなったのは，以下の 3 項目だった。「知識・技能」に関する 2 項目：「高校で学んだ『数学』について十分な知識がある（p=0.030）」，「高校で学んだ『理科』について十分な知識がある（p=0.030）」。「思考力・判断力・表現力」に関する 1 項目：「科学的根拠に基づいて問題を分析的，批判的に考え，解決することができる（p=0.027）」。

5.2 AP に関する自己評価：「学力の 3 要素」及び「関心・意欲」

AP に関する自己評価スコアを「学力の 3 要素」及び「関心・意欲」の 4 要素に分類し，各要素の平均スコアを AO 入試入学者，一般入試入学者，推薦入試入学者の 3 群間で比較した結果を表 4 に示す。

「思考力・判断力・表現力（p=0.009）」，「主体性・多様性･協働性（p=0.024）」，「関心･意欲（p=0.003）」において，AO 入試入学者が推薦入試入学者より高いスコアとなった。同要素の一般入試入学者との比較では，統計的な差はなかったものの平均スコアにおいて，AO 入試入学者が高い結果を示した。

表 4 AP に関する自己評価：各要素の選抜別平均スコア

要　素	AO 入試	推薦 入試	一般 入試	検定
知識･技能	3.56	3.36	3.69	
思考力･判断力 ･表現力	3.89	3.43	3.73	**
主体性･多様性 ･協働性	4.49	4.10	4.25	*
関心･意欲	4.47	4.10	4.27	**

AO 入試 vs. 推薦入試（*p<0.05, **p<0.01）

6 考察

6.1 AP に関する自己評価は選抜の特徴を反映する

AO 入試は，第 2 次（最終）選抜において，特に「思考力・判断力・表現力」，「主体性・多様性・協働性」，「関心・意欲」を重視している。学生の AP に関する自己評価も同様の結果を示したことから，「学生の AP に関する自己評価」と「選抜で重視する要素」との関連性が強く示された。「知識・技能」については，いずれの選抜も学力試験を課しているため，3 群間に有意な差が見られなかったと推察する。

AO 入試は第 2 次選抜において長時間の課題解決型 SGD を行っているが，推薦入試及び一般入試との比較で有意差があった「周囲と良好なコミュニケーションをとることができる」と「他者と同じ目標に向かって協働することができる」は，いずれも他者との協働的な関係を築く能力に関連する。また「学習及び生活の中で自ら積極的に問題点をみつけ，解決方法を探求することができる」と「科学的根拠に基づいて問題を分析的，批判的に考え，解決することができる」は，課題解決能力といえる。AP に関する自己評価結果は，選抜の詳細な特徴も反映することが明らかとなった。

また，一般入試は個別学力検査において数学，理科を課しており，同教科の能力をより重視して評価している。AO 入試では，社会を課さない。AP に関する自己評価結果もこれらを反映しており，各選抜における試験教科の特徴がそのまま自己評価スコアに表れた結果となった。ちなみに英語については，過去にも AO 入試入学者の英語能力について優れるとする報告があり（八木ほか , 2005），本学の他の追跡調査においても同様の事象を確認している。

以上より，入学直後の学生の AP に関する自己評価は入学者選抜の特徴を反映することが明らかとなった。

6.2 自己評価のバイアス

今回の調査では，多くの自己評価項目において推薦入試入学者のスコアが低い値となった。これについては，自己評価に関するバイアスの影響が考えられる。自己評価は，客観試験の結果と異なり，評価に際しては評価者本人である学生の主観が影響を与える。つまり，自身に対する評価が厳しければ，その分自己評価スコアも低くなる可能性がある。また，自己肯定感も自己評価に影響を与えると推測する。推薦入試の出願時期は AO 入試の合格発表後であり，志願者には AO 入試の不合格者も含まれる。本学医学科 AO 入試は，協働性など態度面を評価する選抜であることが知られており，本選抜の合否が合格者・不合格者双方に対し少なからず影響を与えた可能性もある。

6.3 選抜直後の自己評価：検証時期と評価者の提案

本研究は，入学者選抜の妥当性の検証に関して新たな視点を提示している。従来多くの調査研究では入学後の成績を比較対象としているが，これでは調査時期が実際の選抜時より数か月もしくは数年後とな

るため，選抜時の様態と調査時の様態が異なる可能性が出てくる。つまり，検証結果の解釈にあたり，入学後の教育による効果を無視できなくなる。本研究のように選抜直後に調査・検証することにより，更に選抜時の様態を反映した結果が期待できる。

また選抜直後の調査においては，評価は当然教員ではなく学生本人が行うことになる。学生自身という新たな評価者（視点）が誕生するが，例えば，大学が求める能力に関して学生本人の自己評価が高ければ「正当な評価を受けた」という学生本人の満足度も高くなる。これはつまり選抜に対する満足度であり，大学に対する満足度でもある。また，自己評価は学生が己を知り自己研鑽するきっかけにもなる。こうした側面を考慮しても，学生の自己評価という新たな視点は有用である。

本研究は，AP に基づき入学者選抜をとらえ，その妥当性について学生の自己評価という観点で検証した。今後も調査を継続し，更に教員による評価についても検討したい。

注

1)「高知大学入学前 moodle」に関する詳細は，大塚ほか（2019）を参照されたい。

2）高知大学は，入学後の学生と教職員が利用できる高知大学 moodle を設置し授業等で活用している。

謝辞

本調査研究は，科研費（基盤研究（C））［課題番号：16K08872］の助成を受けたものである。

参考文献

大塚智子・関安孝・喜村仁詞・武内世生 (2019).「インターネットを介した入学前教育『高知大学入学前 moodle』――学習意欲維持への試み――」『大学入試研究ジャーナル』**29**, 29−35

西郡大 (2014).「実質的な活用に向けた『入学者受入れの方針』の見直し」『大学入試研究ジャーナル』**24**, 113−120

文部科学省 (2016). 高大接続システム改革会議「最終報告」文部科学省 2016 年 3 月 31 日 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/033/toushin/1369233.htm>（2019 年 3 月 12 日）

文部科学省 (2018). 平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告の改正について　文部科学省 2018 年 10 月 22 日 <http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1397731.htm>（2019 年 3 月 12 日）

八木文雄・倉本秋・大塚智子・奥谷文乃・三木洋一郎・上原良雄 (2005).「医学部医学科における AO（態度評価）方式による入学者選抜―入学後1年修了段階での追跡調査結果―」『医学教育』**36**(3), 141−152.